

現代英語の慣用と辞書・語法辞典等の記述

—— though, although の場合 (1) ——

外 山 敏 雄

ことばは絶えず変化してゆくものであるが、たしかに、今日英語は変容する姿をわれわれの前に展開している。社会の諸変化が早まれば、ことばの変化もまたその歩を早めるであろう。新たに生み出された事物に命名がなされ、新語が続々と生まれてゆく。だが、ことばの変化は新語の生成のみにとどまるものでないことも周知のことであって、統語面にも顕著な変化が認められるのである。

今日ことばの変化は早まっている。とすれば、辞書・語法辞典等の記述がそれに応じて改められてゆかない限り、当然、ことばの慣用と語法辞典等の記述の間に大きなズレが生ずることになるであろう。

今日、辞書や語法辞典は、はたして、慣用の姿を正しく映しているであろうか。

本稿は、1971年以後『時事英語学研究』『英語展望』『英語教育』『北海道英語英文学』などに発表した小論に引き続くものである。今回も、できるだけ主観的判断をさけて具体的客観的に考察を進めてみたい。本稿の直接のねらいは、現代英語における though, although の慣用を、使用頻度の面に焦点を当てて調査分析し、それを語法辞典等の記述と比較対照することにある。

(1)

さて、はじめに語法辞典の記述を検討してみることにする。

イギリスのものでは、代表的なものである M E U¹⁾ をとりあげてみる。そこでは、though が副詞として用いられることと、as though での使用を除けば、両者の間に相異はないが、though の方が ‘much commoner’ である、としている。そして although は、比較的固い文体 (‘the more formal style of writing’), 主節に先行する節を導く時、などに用いられることが多い、としている (s. v. *though*)。この語法に関しては、第 1 版 (1926) と第 2 版 (1965) とで記述に変化は認められない。

アメリカのものには、使用頻度を数字で具体的に記述しているものがみられる。その 1 つは C A U²⁾ である。そこでは、調査した 115 例のうち though が 74% であり、また 2 つの雑誌³⁾ の調査では、いずれも though の頻度は although の 5 倍であった、として、

‘...although seems to be slowly disappearing.’

と結論づけている。しかし、同じ頻度を示すにしても as though, even though および副詞機能の though などのそれはどう処理されているのかもその記述では不明確であり、調査した資料の範囲すら何ら明確に示されていないところでは、満たされないものだけが残る。余りにも性急な結論の出し方であり、厳密さを欠くものと言わざるを得ないであろう。

C A U の記述にたいするそのような評価は Kučera=Francis 調査⁴⁾ のデータを参照することにより一層たしかにされる。同調査は電子計算機による現代アメリカ英語の大規模な語彙統計

調査であり信頼度の高いものであるが、同調査によれば、全資料100万語中の両者の使用頻度は

| | |
|----------|-----|
| though | 442 |
| although | 319 |

である。しかも、thoughには、as though, even though や conjunctive adverb としての使用もあるから、普通の接続詞としての使用頻度は、

442 - α : 319

となり、両者の頻度は一層接近することになる。

調査資料の規模が小さければ、統計的にみて、偶然的因子の入り込む危険性があることは十分注意されなければならないであろう。

上のように、われわれは、Kučera=Francis 調査のデータによって although の使用頻度は現実には C A U の記述ほど小さくはないことを窺うことができるのであるが、Kučera=Francis 調査自体にも、大規模な調査ではあるが、そこでは各語彙の機能の別は問題とされていないという限界があって十分な満足は得られない。

では、わが国のものではどうであろうか。好むと好まぬとにかくわらずそこに見出されるのは、概ね、英米の辞書・語法辞典にならった記述である。わずかに目にとまったのは次の 2つである。

上本佐一『語法雑記』(1953)

金口儀明「英語の語法」(『英語教育』1972年3月)

前者は、1949年発行の *New York Times Weekly* と *Reader's Digest* 各1冊ずつの調査結果を示し「10数年前にくらべて although の使用頻度が最近大きくなっている」とし、後者はある書物の1つの章だけと、*Reader's Digest* のある号のある1つの記事とを調べてみたものにすぎない。

断片的な調査から使用頻度を云々することには無理があるであろう。

(2)

以上、though, although の頻度について語法辞典等の記述を検討してみたが、以下、今回おこなった調査について述べゆくこととする。

調査した資料のうち戦前のものは、Everyman's Library, 954 の

Modern Short Stories, 1939

である。この短篇集には、Joseph Conrad (1857-1924) から William Saroyan (1908-) まで20人の作家の作品がその出生年の順に掲載されているが、多数の作家の作品が集められている点からみて、調査資料としてそれだけ価値が高いと言えよう。調査の結果は次頁の表に示すとおりである。

なお、表中の略号 F, M, E は、though, although の文中に占める位置を示し、それぞれ front-position, mid-position, end-position を表わす。⁵⁾

この表から色々なことが言えるであろう。たしかに、普通の接続詞に限ってみても、though は although よりもかなり頻度が高い。その意味では、(1)で見た H. W. Fowler の観察は当っているとも言えるであろう。ただ、同時に見のがしてならないのは、表の下の方、つまり、新しい世代の方に although の使用が見られることであろう (W. S. Porter はアメリカ人であることに注意しておきたい)。同じことは conjunctive adverb 'though' の使用についても

| AUTHORS | although | | | | though (conj.) | | | | as though | even though | conjunctive adv. 'though' |
|-----------------|----------|---|---|-------|----------------|----|----|-------|--------------|----------------|------------------------------|
| | F | M | E | Total | F | M | E | Total | | | |
| Joseph Conrad | | | | | | | | | 1 | | |
| Rudyard Kipling | | | | | 5 | 1 | 6 | | 1 | | |
| W. S. Porter | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| H. H. Munro | | | | | 1 | 1 | 2 | | 1 | | |
| W. S. Maugham | | | | | 3 | 1 | 4 | | 2 | | |
| T. F. Powys | | | | | 1 | 1 | 2 | | | | |
| S. Anderson | | | | | | | | | 1 | | |
| A. E. Coppard | | | | | | | | | | | |
| E. M. Forster | | | | | | 1 | 2 | 3 | 1 | | |
| P. G. Wodehouse | | | | | 2 | 1 | | 3 | | | |
| J. Joyce | | | | | 1 | 2 | 3 | | | | |
| D. H. Lawrence | | | | | | | | | | 1 | |
| S. Aumonier | 1 | 2 | 3 | | | | | | 3 | | |
| K. Mansfield | 1 | | 1 | | | 1 | 1 | | 5 | | |
| S. Benson | | | | | 1 | 3 | 2 | 6 | 4 | 1 | |
| G. Bullett | | | | | 1 | 1 | 1 | 3 | 1 | | |
| R. Hughes | | | | | | | | | | | |
| V. S. Pritchett | 1 | | 1 | | | | | | 5 | | |
| H. E. Bates | 1 | 1 | 2 | | 4 | 2 | 6 | | 3 | | 1 |
| W. Saroyan | | 1 | 1 | | | | | | | | |
| Total | 3 | 2 | 4 | 9 | 13 | 12 | 14 | 39 | 28 | 1 | 2 |

言えるようにも見える。

同じ戦前のものでも世代による相異を見のがしてはならないであろう。そこに時代の流れが窺われることが重要であると思われる。

(3)

戦前のものについては以上の考察にとどめて、今日の英語の場合に進みたい。資料として用いたのは次の6点の出版物である。

- 資料 1, *Reader's Digest*, 1970⁶⁾
 - 資料 2, *The New Yorker*, 1972⁷⁾
 - 資料 3, *Tenno in Europe*, 1971⁸⁾
 - 資料 4, R. Cook, *The Legacy of the Stiff Upper Lip*, 1969
 - 資料 5, J. Brooks, *Henry's War*, 1964
 - 資料 6, A. H. Marckwardt & R. Quirk, *A Common Language*, 1967
- さて、調査の結果は次のとおりである。⁹⁾

* 資 料 1

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{although} \dots \dots 54 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots 36 \text{ (conj.)} + 9 \text{ } \begin{matrix} \text{even} \\ \text{as} \end{matrix} \text{ though} + 6 \text{ (adv.)} = 51 \end{array} \right. = 54$$

* 資 料 2

$$\begin{cases} \text{although} \dots \dots \dots 54 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots \dots 59 \text{ (conj.)} + 23 \begin{cases} \text{even} \\ \text{as} \end{cases} \end{cases} \text{ though} + 9 \text{ (adv.)} = 91$$

= 54

* 資 料 3

$$\begin{cases} \text{although} \dots \dots \dots 6 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots \dots 6 \text{ (conj.)} + 3 \begin{cases} \text{even} \\ \text{as} \end{cases} \end{cases} \text{ though} + 1 \text{ (adv.)} = 10$$

= 6

* 資 料 4

$$\begin{cases} \text{although} \dots \dots \dots 3 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots \dots 21 \text{ (conj.)} + 4 \begin{cases} \text{even} \\ \text{as} \end{cases} \end{cases} \text{ though} + 10 \text{ (adv.)} = 35$$

= 3

* 資 料 5

$$\begin{cases} \text{although} \dots \dots \dots 10 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots \dots 6 \text{ (conj.)} + 0 \begin{cases} \text{even} \\ \text{as} \end{cases} \end{cases} \text{ though} + 9 \text{ (adv.)} = 15$$

= 10

* 資 料 6

$$\begin{cases} \text{although} \dots \dots \dots 14 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots \dots 7 \text{ (conj.)} + 2 \begin{cases} \text{even} \\ \text{as} \end{cases} \end{cases} \text{ though} + 7 \text{ (adv.)} = 16$$

= 14

なお比較の便のために(2)で検討した戦前の資料の場合を同じ形でかかげる。

* *Modern Short Stories*

$$\begin{cases} \text{although} \dots \dots \dots 9 \text{ (conj.)} \\ \text{though} \dots \dots \dots 39 \text{ (conj.)} + 29 \begin{cases} \text{even} \\ \text{as} \end{cases} \end{cases} \text{ though} + 2 \text{ (adv.)} = 70$$

= 9

今ここに得られた結果から、*though*, *although* の使用頻度について、今日の英語の慣用は戦前のそれとはかなり大きく変化している、と言い得るであろう。資料によるデコボコはある¹⁰⁾が方向性は十分つかみ得るであろう。

(1)にあげた Kučera=Francis 調査のデータから、普通の接続詞の場合 *though*, *although* の使用頻度は同程度であることが推定されるが、ここで得られた結果は、全体的にみてその推定とあまり大きく違はない、とみてよいであろう。そのような判断の1つの拠り所としては、個人個人には、それぞれ文体上の好みがあるが、新聞雑誌は執筆者が複数であるため、そのような個人的な要素が平均化され偏りが相殺されている、と考えられること、更に、資料1・資料2のように用例数の多いものの方が当然、統計的に有意性が大きいと考えられること、をあげてみたい。

上の調査の結果からみて、接続詞 *though*, *although* の頻度についての M E U, C A U などの記述は、今日の英語の慣用を正しく記述したものとはいえないと思われる。

M E U の第2版が第1版の記述をそのまま踏襲している間に、慣用の現実は大きく変化したものとみられるのである。

(4)

以上(3)では接続詞 *though*, *although* の使用頻度を検討したが、次に、文中での位置という

面から見た場合、統計的にそれらの分布には果して片寄りが見られるか、その点を検討してみたい。

普通の接続詞としての *though*, *although* を、その文中に占める位置によって、(2)の場合と同一規準によって分類してみよう。その結果は次に示すとおりである。¹¹⁾

[資料 1]

| | | March | May | June | August | Total |
|----------|---|-------|--------|------|--------|--------|
| although | F | 10(8) | 10(10) | 5(5) | 12(10) | 37(33) |
| | M | 3 | 5 | 0 | 0 | 8 |
| | E | 2 | 2 | 2 | 3 | 9 |
| though | F | 4(4) | 6(6) | 1(1) | 9(7) | 20(18) |
| | M | 2 | 1 | 1 | 0 | 4 |
| | E | 3 | 3 | 3 | 3 | 13 |

[資料 2]

| | | Jan.8 | Jan.15 | Jan.22 | Jan.29 | Total |
|----------|---|-------|--------|--------|--------|--------|
| although | F | 7(5) | 4(4) | 11(11) | 5(4) | 27(24) |
| | M | 1 | 3 | 1 | 3 | 8 |
| | E | 3 | 1 | 8 | 7 | 19 |
| though | F | 2(2) | 4(3) | 5(4) | 2(2) | 13(11) |
| | M | 5 | 4 | 2 | 6 | 17 |
| | E | 7 | 9 | 8 | 5 | 29 |

[資料 3, 4, 5, 6]

| | | 資料 3 | 資料 4 | 資料 5 | 資料 6 |
|----------|---|------|------|------|------|
| although | F | 3(3) | 3 | 5(2) | 12 |
| | M | 0 | 0 | 2 | 0 |
| | E | 3 | 0 | 3 | 2 |
| though | F | 1(1) | 6(1) | 1 | 1 |
| | M | 2 | 2 | 3 | 1 |
| | E | 3 | 13 | 2 | 5 |

表の中で（ ）内の数字は、front-position をとるものうち *though*, *although* が文頭に立つものの数を表わす。¹²⁾

MEU が、*although* は比較的固い文体、主節に先行する節を導く時、などに用いられることが多い、と記述していることはすでに(1)で述べた。

6 点の調査資料は、規模の点でも、また性格上も異なるから、6つの資料の各位置の合計値をそれぞれ単純に足し合わせて得られた数値を比較することは、厳密な意味では、たしかに問題があるであろう。しかし、その単純合計値を近似的なものと解釈して一定の傾向を窺うこととは可能であろう。ここでの目的はそれで十分達せられるものと思われる。

6 つの資料の数字を全部足し合わせると、

| | | | | | | | | | |
|----------|---|-------|----|-----|--------|---|-------|----|-----|
| although | F | | 87 | 141 | though | F | | 42 | 136 |
| | M | | 18 | | | M | | 29 | |
| | E | | 36 | | | E | | 65 | |

となる。although は主節に先行する節を導くことが多い、とする M E U などの記述には妥当性を認めることができると言えよう。

(5)

さて、次に conjunctive adverb ‘though’について検討したい。この、副詞の機能で用いられる though が informal な文体に多く用いられることはよく知られるところであろう。

ここでは、この語法を、① 使用頻度 ② 文中に占める位置、の 2 点について検討してみることにする。

まず 使用頻度であるが、(2)で見たように戦前のものでは非常に頻度が小さく、though の使用総数 70 のうち、副詞機能のものは僅か 2 例にすぎない。ところが、今日の英語では、

| | | | | |
|------|-------|----|-----|----|
| 資料 1 | | 51 | のうち | 6 |
| 資料 2 | | 91 | 〃 | 9 |
| 資料 3 | | 10 | 〃 | 1 |
| 資料 4 | | 35 | 〃 | 10 |
| 資料 5 | | 15 | 〃 | 9 |
| 資料 6 | | 17 | 〃 | 7 |

と、いずれの資料についても、その割合が戦前のものをかなり上まわっている。

これを合計すると、使用総数 224 のうち 42 にのぼるから、今日の英語では、戦前にくらべて conjunctive adverb の though の使用がかなり増加している、と言うことができそうである。(戦前のものでも、新しい世代の方に使用が見られたことを思い起すべきであろう)

今日の英語においては、過去の時代のそれにくらべて、speech level の core が informal= colloquial zone の方へ移ってきており、端的に言って、今日では一般に固苦しい文体よりはくだけた文体が好まれる傾向が認められるが、今回の調査で見られた conjunctive adverb ‘though’ の戦前の資料から今日の英語の資料への使用頻度の推移の状況も、たしかにそのような現代英語の流れに沿ったものとして理解することができると思われる。

次に、この副詞の 文中での位置の問題であるが、まず語法辞典の記述を見るところにする。M E U は文尾 (‘placed last’) としている。そのほかで記述のあるものをさがすと、Evanses¹³⁾、節尾 (‘at the end of its clause’), AHD¹⁴⁾、文尾・節尾 (‘at the end of a sentence or clause’) といったところである。

さて、M E U の「文尾」とする記述は、本稿でとりあげた戦前の資料の用例に関する限りは、たまたま一致する。

‘Appen so,’ she said at length; ‘but I never thought Jimmy would, though.’¹⁵⁾

‘... Perhaps he’s older, though. ...’¹⁶⁾

しかし今日の英語の場合はどうであろうか。42例をその位置について分類集計すると次の表のとおりである。

| | 文 尾 | 節 尾 | 文・節中 | Total |
|-------|-----|-----|------|-------|
| 資料 1 | 0 | 2 | 4 | 6 |
| 資料 2 | 3 | 2 | 4 | 9 |
| 資料 3 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 資料 4 | 2 | 3 | 5 | 10 |
| 資料 5 | 5 | 3 | 1 | 9 |
| 資料 6 | 0 | 2 | 5 | 7 |
| Total | 10 | 12 | 20 | 42 |

文中・節中に、それらを中断させるかたちで *though* が埋め込まれる場合が多いことがわかる。例えば

On closer inspection, *though*, they were not houses.¹⁷⁾

Sometimes, *though*, an error can't be corrected.¹⁸⁾

Elwyn, *though*, gave him a friendly grin.¹⁹⁾

The great fear in Japanese Government circles, *though*, is that the Americans, having persuaded the Japanese to take up this unpopular cause, will somehow back away leaving Tokyo holding the baby in the face of widespread domestic opposition.²⁰⁾

以上の調査結果から見て、さきにあげた語法辞典の記述は今日の英語の現実を正しく記述したものとは言えないであろう。

今回の調査によって、*though*, *although* の慣用は戦前から今日にかけて、かなり大きく変化していることを認めることができた。*although* の頻度は目立って大きくなっているし、副詞機能の *though* の増加も顕著である。後者の増加は、現代英語の従属構造 (hypotaxis) 減少・並列構造 (parataxis) 増加、の方向に沿うものである。

今日の英語の慣用と辞書や語法辞典の記述の間には、これらの語法についても、やはり大きなズレを認めざるを得なかった。

では、そのことはどこから生ずるのか。答は明白である。MEU に典型的に見られるように、過去の記述が踏襲されることによるのである。言語は変化してやまないのである。40年を距てて記述が改められなければ結果はどうなるか、その帰結は自明のことであろう。

本稿では、わが国の語法辞典にはほとんど言及していないが、別に他意はない。そこでは、英米のものにそのままならった記述が見出されるのである。

言語理論の研究の隆盛にくらべて、この面は何と不毛なことであろうか。

(49年4月12日稿)

— 註 —

- 1) H. W. Fowler, *A Dictionary of Modern English Usage*, First Ed. 1926, Second Ed. 1965.
- 2) M.M. Bryant, *Current American Usage*, 1962.
- 3) *The Atlantic Monthly, The Nation*
- 4) H. Kučera & W. N. Francis, *Computational Analysis of Present-Day American English*, 1967.
- 5) F, M, E の分類規準について一言する。特にはっきりさせておかねばならないのはMであろう。

mid-position に分類したのは、簡潔に言えば、

... (al)though ... , ...
 (A) (B)

において、(A)(B)両部分が構造上切り離せないように一体化しており、その一体化した流れを中断する

かたちで (al)though 節が組み込まれている構造である。細かく色々な場合に分類することも可能であるが、本質的にはそのように集約してとらえることができよう。1例をあげると、

His limp, *though* not consciously assumed, had developed only since last night.
(op. cit., p. 217)

なお、front-position, end-position の例を1つずつあげておく。

But *although* he spoke in a very bold way his excitement never ceased. (F) p. 288.
We put him to bed, *though* he was not ill. (E) p. 109.

また

… ((al)though...). / … ((al)though...) … / … — (al)though … — … .

などの場合、さらに colon, semi-colon 使用の場合なども普通の場合に準じて分類した。

但し、… — (al)though … の形は統計から除外した。この形の場合は、むしろ conjunctive adverb に近いものと考えられる。

6) March, May, June, August の4冊(本国版)。手許にあるものを利用したため連続した号数とならなかった。広告のページは調査対象としなかった。

7) Jan. 8, Jan. 15, Jan. 22, Jan. 29 の4冊、広告のページ及び巻頭の“Goings on About Town”的記事は調査対象からはずした。

8) 原書房刊、天皇ヨーロッパ訪問中の英米各紙の記事を集めたもの。英4紙、米2紙の記事をおさめているが、英紙だけを調査した。

9) 全資料の中に次のような、語と語を結合する though の用例が見られたが、これらはもちろん統計から除かれている。

In 1921 the Crown Prince Hirohito of Japan risked the displeasure of his ancestral spirits, not to mention dire *though* mundane political consequences, by coming out of holy seclusion in his homeland to visit Britain. (資料3, p. 2)

In a test application of the new science of “counterinsurgency” it has been subjected to prolonged, *though* inconclusive, devastation. (資料2, Jan. 8, p. 53)

10) 資料4では although の頻度が目立って小さいが、個人の好みということも考えられよう。

11) 資料6について Marckwardt の発言に含まれるものと、Quirk のそれとの内訳を示すと、

| | F | M | E | Total |
|----------|------------|---|---|-------|
| although | Quirk | 6 | 0 | 6 |
| | Marckwardt | 6 | 0 | 8 |
| though | Quirk | 0 | 1 | 3 |
| | Marckwardt | 1 | 0 | 4 |

12) ちなみに mid-position をとるもの全48例中 though が clause の先頭に来ないのは次のような倒置の2例だけである。

As the President now moves toward lifting the “quarantine” of China, as we recognize at long last that there really still in a China, Communist *though* it may be, the tragic irrationality of the Vietnam war is thrown once again into high relief. (資料2, Jan. 8, p. 54).

Yet Stratton's public criticism of the Army's handling of the Koster charges, important though it was, still did not bear on the crucial issue of the Army... (資料2, Jan. 29, p. 70).

なお、end-position では、すべての例において though, although が clause の先頭に立っている。

13) B. Evans & C. Evans, *A Dictionary of Contemporary American Usage*, 1957.

14) *The American Heritage Dictionary of the English Language*, 1969.

15) op. cit., p. 152 (D. H. Lawrence).

16) op. cit., p. 303 (H. E. Bates).

17) 資料4, p. 147.

18) 資料1, August, p. 22.

19) 資料5, p. 129.

20) 資料3, p. 70.